

Vascular Street

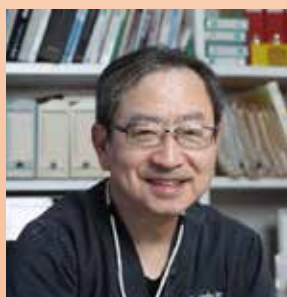

 特集

インドの医療の紹介

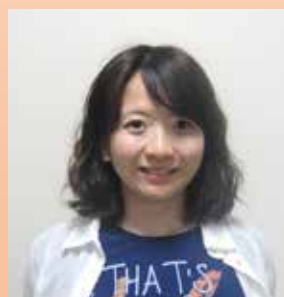
於：福岡大学医学部 基礎第一講堂



【特別講演】 Dr. Sujit K. Brahmochary



福岡大学医学部長
朔 啓二郎 先生



福岡大学医学部 3 年生
宮崎 稚子 さん

はじめに

インドは日本の約9倍という広大な面積で、人口は10億人を超えています。地域により医療事情が異なりますが、日本では聞いたことも見たこともない病気や感染症があります。インドは水事情が悪く、旅行者は旅行中や帰国後、食べ物や飲み物を介して感染する消化器感染症が発症するケースがよくあります。ウイルス性下痢、細菌性下痢、コレラ、腸チフス、パラチフス、アメーバ赤痢、等々です。このほかにもデング熱や回虫などの寄生虫疾患があります。インドは経済発展が著しい BRICs (ブラジル、ロシア、インド、中国) とよばれている国の一つで、発展に伴い工場の汚染水や自動車などの排気ガスによる環境汚染が大問題になっています。今日は、福岡大学医学部3年生の宮崎稚子さんが、彼女が活動する国際医学生連盟 (IFMSA) の中でプロジェクトの一員としてインドのコルカタ (カルカッタ) に行った時にお世話になった Sujit 先生をお呼びして講演会を開催しました。

朔 宮崎さんは以前より国際医学生連盟 (IFMSA) で活動してまよね。福岡大学医学部にも数名の学生さんが様々な国に行つて医療支援や研究を行っているのですが、この組織の紹介をしてください。

宮崎 第2次世界大戦後の1951年にヨーロッパで設立され、本部をフランスの世界医師会内に置いています。医学生を代表する国際フォーラムとして認められた非営利・非政治の国際NGOです。2014年3月時点で、99の国と地域から多くの医学生が参加しています。その他、様々な国際学生団体・国際機関、UNESCOやUNICEFなどの国連機関とも公式な関係を結んでいます。IFMSAには、臨床交換留学、基礎研究交換留学、公衆衛生、性と生殖・AIDS、人権と平和、医学教育の6つの常設委員会があり、世界各国で様々なプロジェクトを運営しています。日本は1961年にIFMSAに加盟し現在に至ります。2014年4月現在、団体会員53校、個人会員約1000名、IFMSA-Japan(日本支部)の中でのメーリングリストには3000名以上が参加しています。IFMSA-Japanは、年間150名以上を交換留学に送り出し、子供を対象とした健康増進プロジェクト、生活習慣病予防啓発活動、ピアエデュケーション、貧困問題や死生観・医療倫理・地域医療について学ぶ勉強会や、東南アジア、アフリカでの保健衛生活動、平和について考えることをテーマとした国際サマーキャンプ、アジア地域での災害医療分野での人材育成プロジェクトなど、さまざまな国際活動も行っています。私はIFMSAの中の一つのプロジェクトであるアジア共同健康プロジェクト(ACHP)の派遣員として、インドの Kolkataに医療支援のお手伝いに行かせていただきました。ACHPはIFMSAの中にある公衆衛生に関するプロジェクト(SCOPH)の一つです。

朔 宮崎さんは、今年、基礎研究交換留学生としてチリの大学医学部へ行きましたね。頼もしい限りです。Sujit先生はインドの Kolkataで、Institute for Indian Mother & Child (IIMC)を設立され、その代表をされておられます。貧困地域での医療活動のために立ち上げた団体ですが、インドの地方(田舎)での医療の現実とその発展についての講演をしていただこうと思います。

Dr. Sujit 私はインドの Kolkataで医学を学び、その後、ベルギーで小児科の専門医になりました。その後インドの貧しい医療、特に小児科の専門医すらいな田舎の貧困にあえぐ人々の役にたとうと、妻とともに Kolkataに戻り小児病院でマザーテレサと一緒に働きました。1990年の頃で

す。マザーテレサはノーベル賞を受賞されましたが、私はその時の医学的プロジェクトのリーダーをしていました。 Kolkataはインドでも貧しい地域です。文字も書けない、病気に関する知識すらない、医師もいません。マザーテレサと一緒にとつた写真(図1)ですが、彼女は進んで写真はとつてくれないのですが、私と妻とは喜んで一緒に写つてくれました。医師は社会的に尊敬されています。医師になることは、患者さんと最後まで一緒に過ごすことだと思います。それをマザーテレサから教えていただいた気がします。その後、1989年に Kolkataから30km離れたテガリアで一人で医療をスタートさせました。当時は病院やクリニックはありません。あばら屋をクリニックにしてのスタートです。こんな建物(図2)をかりてクリニックを作つたのです。初めは住民の皆さんに信用されなかつたのですが、徐々に地域の方に受け入れられたのです。そうこうしている内に、大きな土地を提供を受け始めました。インドの田舎では、何もしなければ患者さんは死んでいきます。しかし、基本的な医学の知識や清潔に関する知識があれば、人を助けれるのです。例えば、子供の感染症ですが、ほつたらかしにしている間に大変なことになる。細菌が入つて顔も全身



図1



図2

も皮膚炎を発症していますが(図3-A)、最小限の適切な治療でどうにかなるのです(図3-B)。まず、母親がどうすれば良いかわからないのですから。真菌、寄生虫、結核も、最低の医療資源や基本的医学知識で大丈夫です。まず知識がないのです。例えば、母親が授乳しているときに乳房が感染した人がいます。乳房に膿瘍ができて、それを基本的知識で治療することができます。最先端の医療技術が必ずしも必要ではないのです。清潔とか、感染とかに関する知識で十分ですね。最初は大変でしたが、最近では救急のシステムもうまくいき始めました。20年かけてここまで来ました(図4)。口唇裂の手術をすることもできるようになったわけです。未熟児もケアができます。ある国から保育器の提供を受けたのですが、大変ありがたかったです。しかし、器械がなくてもある程度できますね。医学の知識が重要です。



図 3-A



図 3-B



図 4

貧困のために低栄養になることがあります。栄養が足りない、子供を医師に診せたくても医師がいない、古典的な迷信に従っているだけです。それで、私は、地元でとれる作物から栄養になるサプリメントを作ってきました。これは実際に効果がありました。脂肪はピーナツ、蛋白は豆を粉にして食べさせます。

財源は色々なところからの寄付に頼ってます。そうこうしているうちに、若いドクターが私たちの活動に賛同してきました。世界中から医療関係者がきてくれます。毎月20-30人が1ヶ月間位、医学生や看護学科の学生が来てくれます。学生は医師免許は持ってませんが、私たちの指導の下に行えることがたくさんあります。また、ベルギーの大学の先生が休暇を利用して指導してくれます。そして、患者さんに対しての医療が始まります。地域の人達を訓練することも重要です。その地域の人達、学生さんなどと共に作ってきたのです。そうしているうちに私のプロジェクトはIIMCという組織になり、多くの寄付を取れるようになってきました。レントゲンも日本からのプレゼントです。スタートして10年後に、皆さんに幸運と望みを与えられるものになったのです。インドにはカースト制度や宗教も様々ですが、それは一切関係なく接しています。IIMCは病气や無学、差別から解放され、多くの友人やボランティアの方々と運営しています。

さて、病院が軌道に乗ってきていったんはよくなったのですが、患者さんが治っても患者さんが次々に出てくるのですね。何故、同じことが繰り返されるのか？この問題にぶつかったのです。患者さんがあまりに無知なんです。患者さんが文字が読めない。従って、子供たちの教育をすることから始めないといけません。ここに行き着きました。皆さんの1回の食事代で教育をスタートできます。それで、里親の制度を作ったのです。そうすることでいくつもの学校ができたのです。10年前に学校に行けなかった子供たちが学校に行けるようになった(図5)。医療は少しできますが、教育はできない、教育ができれば医療のレベルも高くなります。このことは大きな意味があります。病院を作って学校を作る、しかし、その後、地域を活性化させることが大切です。母親たちに仕事ができるようにする活動することに力を入れました。今は2600人の女性たちがミシン



図 5



を使って物づくりをすることをやり始めました。女性が虐げられていた社会ですから、それが変わろうとしています。私たちの行動が、学校や仕事・産業を活性化してきたのです。お母さんたちが自信をつけてくるのですね。このような活動は大きな哲学を基盤にしています。マザーテレサやガンジーの信念です。その考え方に基いて私自身が行動してきました。医療・教育・経済、この3

つの活動は共通したものがあります。私たちは、現在、25カ国から支援を受けてます。私たちのセンターは約700名の常勤がいます。このような活動がもっと世界全体に広まるように祈ってます。私たちの活動に興味がある方はウェブサイト (www.iimcmissoncal.org) を是非みてください。子供たちのスポンサーになっていただいても結構です。

この世界は食べ物に対する飢餓よりも、

愛や感謝に対する飢餓の方が大きいのです

マザー・テレサ (Mother Teresa, 1910年 -1997年) は、カトリック教会の修道女にして修道会「神の愛の宣教者会」の創立者である。「マザー」は指導的な修道女への敬称で、「テレサ」は修道名である。コルカタ (カルカッタ) で生まれたテレサの貧しい人々のための活動は、後進の修道女たちによって全世界に広められている。生前からその活動は高く評価され、1979年のノーベル平和賞、1980年のバーラ・ラトナ賞 (インドで国民に与えられる最高の賞)、1983年にエリザベス2世から優秀修道会賞などを受賞。1983年、高齢のテレサはヨハネ・パウロ2世との会見のために訪れたローマで心臓発作に見舞われ、1991年には心臓にペースメーカー植え込みを行った。また同年、テレサは健康状態を理由に総長の辞任を願い出たため全会員による無記名投票が行われた。結局、賛成票を投じたのはテレサ本人だけであとはすべての方は反対であったため、彼女は総長に留任することを同意した。

マザー・テレサ -



1997年9月5日、世界が見守る中、テレサはカルカッタにて87年の生涯を終えた。テレサが亡くなったとき「神の愛の宣教者会」は123カ国の610カ所で活動を行っていた。活動内容はホスピス、HIV患者のための家、ハンセン病者のための施設 (平和の村)、炊き出し施設、児童養護施設、学校などである。宗派を問わずにすべての貧しい人のために働いたテレサの葬儀はインド政府によって国葬とし行われた。彼女の死は国家的な損失との意味である。世界の人々も彼女の偉大な働きを思っ追悼し、宗教の枠を超えて尊敬の象徴となった。

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/E3%83%9E%E3%82%B6%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%83%86%E3%83%AC%E3%82%B5、一部改変>)。

Prof. Saku's Commentary

私は医学部の5年生の春休みに、デリー、アグラ、ジャイプール、ボンベイ (現在のムンバイ) に旅行したことがある。10人程度のツアーに入って10日間、当時はインドの最高のホテルに宿泊し、バスやタクシーでの観光をしてきた。その時のゴージャスな雰囲気は忘れられなかった。2-3年前前に学会でムンバイに行ってきたが、若いときに持ったイメージとは全く異なるものだった。観光でのインドは、多分違ったもので、美しく雄大な風景が心に焼き付いたが、今回はむしろ貧困や解消できない格差、汚い町並みの方が印象的だった。何のために医師になるか、患者さんに寄り添う医療、それだけでは問題解決にならず、子供の教育、そして女性たちの仕事・産業への参画を目論んだ Dr. Sujit のプロジェクトには頭が下がるものがある。